

## 神に選ばれたことば (4) —— 男性ことば ——

武内 道子

アラビアの挨拶ことばの特徴として、相手の言った句をそのまま返さないことを述べた（神に選ばれたことば(1)）。呼びかけ専用と受け手専用の区別があったり、前と後をひっくり返したり、接尾語をつけたりといくつかのバリエーションがある。彼らがことばを操るのにいかに細かい神経を使い、また楽しんでいるかを思い知る。彼らのことばのやりとりを見ていると、自分から止めたら失礼といわんばかりにえええと続くのであるが、同時にそこに彼らの表現がオーバーにさえ響く印象をもつ。

アラビア語は全体として、くり返しの好きなことば、したがって誇張傾向のある言語といえる様な気がする。動詞の形は主語と人称と数において一致し、しかも主格代名詞が必要である。すなわち、英語で文字通り翻訳すると、Allah he blesses you.となる。また、いわゆる不定詞形というのがなく、人称を表示した未完了形の動詞がいくつもつながっていく。たとえば、You must you come you visit him.という言い方によって、You must come to visit him.の意味を表すことになる。アラビア語の動詞表現のたたみかぶせる押しの強さといったものを見せつける現象である。

場所を示すとき「右手にある」で十分なところ「あそこに右手にある」、「学校のうしろにある」といえると思うが、「あそこに学校のうしろにある」という言い方をする。「火事はどこ？」と聞いたら、ハウスボーイに「それをごらんない、あそこです」と大仰な言い方をされてびっくりした。

形容詞に比較級と最上級の区別がない。「より」に相当するminがあったら比較級と解釈され、あとに名詞が続いたら最上級の解釈となる。さばくのイメージとして欠くことのできないらくだのことをジャマルというが これは「美しい」という意のジャミールと根を同じくする（つまりらくだは美しいものということ?）。「春は美しい」というのは、イツラビ・ジャミール（現在のことを述べる場合はbe動詞に当たるものは出てこない）、

「秋の方が春より美しい」は、ジャミールから変化したアジマルを使って、アッハリーフ・アジマル・ミン・イツラビとなるが、「秋は一年中で一番美しい」というときもアジマルを使って、アッハリーフ・アジマル・ファシル・フィサナ（ファシルは「季節」、フィサナは「一年中で」に当る）。

考え方をかえてアラビア語の形容詞は原型と強調形という二つの形があるという理解の方がよいのであろう。強調形を使うとき、必ずしも「何かより」とか「～の中で一番」という概念があるわけではなく、「非常に美しい」とか「絶対的に偉い」という意味あいのように思われる。スーク（市場）でハーダ・アルハス（This is cheaper.）と言って客寄せをする。「これはとても安いよ」と言いたいだけなのである。

そして、私が最も面白いと思うのは強調形が常に男性単数で表されるということである。形容詞は、あとに続く名詞、あるいは限定用法のときは主語と、数の性において一致するのであるが、強調形に限ってこの規則は無視される。誇張の傾向、ダイナミックな響きをして、アラビア語はどこか男性的な言語という、私の漠とした思いがにわかに力を得てくる気がする。男性優位社会のアラブ社会がことばにも投影されているようで興味深い。

四回に亘ってアラビア語の特徴を垣間書きした。他にもVSO言語であるとか、現代の書きことばと話しことばの差の方が、現代の書きことばと古典の間の差異よりも大きいという現実、かんなくずのような文字を右から左へ書いていくスタイル（石に刻んだから?）など アラビア語特有の現象がある。

アラビア半島北部を発祥地としてイスラムの発展とともに拡大し、征服者の言語として八世紀後半までに強固な地位を築いた。以後十二世紀までアラブ帝国—何故か響きもロマンティックな「サラセン帝国」—の公用語として、アラビア語はその最盛期を謳歌した。アラビア語のもとに花開い

たアラビア文化が、のちにヨーロッパ植民地を介して西洋文明の基になり、その西洋文明を取り入れて近代化を完成させたのが今日の日本であるこ

とに思い到るとき、アラビア語への私の興味はひとしおである。